

## Franz Kafka: Der Prozeß の裁判所

神波比良夫

フランツ・カフカの小説「審判」の「大聖堂において」においてその暗黒の中から出現した刑務所僧が「思い違いをするな」と云う。すると主人公のヨーゼフ・K. が「何を思い違いするのです」とたずねる。「お前は法を思い違いしている」と云う言葉がある。この法、したがって罪、裁判がこの小説で表面的に大きくクローズアップされている重大なテーマである。

この小説の始めはある朝 K. が突然逮捕される事から始まる。但しこの逮捕とは、逮捕されたものがどこへでも好きな処へ行き、したい事をしていてよいのであつて、通常の状態と違うのは、ときどき裁判所へ出頭して審問を受けなければならないと云うことであるが、事実この審問は一度も行われていない。そしてこの小説の筋は、K. がこの裁判、法の実体を探知し、如何にしてこれに対して身を護るべきか百方苦心するのであるが、ついにその片鱗だに知ることができず、法に屈して死んでしまうと云うのである。この裁判所と云われるものが実に奇怪なものであつて、この裁判所は一定の建物の中にあるのではない。町中のいたる処、むさくるしい処、すべての屋根裏の部屋が裁判所なのである。始めて K. が指定されて出頭した貧民窟のような建物もそうだし、またこの町通りとは町の反対側に位置するやはり貧乏人の住む建物の中も裁判所である。

更にこの裁判所はこの他にも奇々怪々な特徴をもっている。まずそこに働いている人々、すなわち役人の腐敗である。始めに彼の部屋に逮捕の告知にきた三人の役人の中の二人は、彼の朝食を横取りにしてたべてしまつたり、また彼の衣類を取り上げようとする。

裁判所の中もまた乱脈をきわめている。そこの司法研修生は公吏の妻を誘惑し、いたづらをする。それだけではなく、その上司の予審判事はこの研修生に命じて、公吏の妻をさらつて来させる。またこの予審判事の机の上につけている書籍は、ヨーゼフ・K. が公吏の妻の手引きでその留守中にあけて見ると、わいせつな本なのである。

この裁判所の奇妙なことはこれに止らない。先きに一寸ふれたように、一定の建物にあるのではなくて、町中のあらゆる処、特にしいたげられ、抑圧された人々の住む家等、町中がすべてそうである。いやむしろヨーゼフ・K. の環境がすべて裁判所になつてると云えるくらいである。それにもまして面白いのは、こうした下層の民衆が多分また裁判所の構成メンバーに入つているらしい事である。この事は例えば、三人の役人が逮捕に来たとき、K. は始め全然それに気づかなかつたけれど、それらの人々と一緒に彼の勤めている銀行の下級行員が三人きていた。彼等はその後も常にK. を見張つているのであつて、K. が裁判所に行くときも、彼が郷里へ帰ろうとする時も、また最後に彼が死の場所へ行こうとするときも、何等の動機もないのに、これらの中のあるものが必ず姿を見せるのである。

それだけではなく、K. がタイトレリーの処へ行つた時、彼を案内した少女達がある。後にタイトレリーの語る処によれば、このませてエロティックな少女達もまた裁判所に属するのである。また、K. が始めて裁判所へ行つたとき、彼の入つた部屋、すなわち予審判事の部屋の中にいた大勢の人達は始めは被告やまた一般の人々と見えたのであつた。K. はここ

で裁判所に向つてと云うよりもむしろこの大向うをねらつて彼の裁判にたいする不平不満をぶちまけて一種のアジ演説をする。これらの人々は K. に傾聴して、大いに賛意を表するが如き素振りをするので、K. は始め大いに気をよくして、ますます調子にのつてしゃべり立てる。処が次第にこれらの人々は結局どうも裁判所と何かの関係があるらしいことが K. に分つて来る。それで彼はその演説を途中で止めてしまう。これらの人々は決して全部が裁判所の所員であるとかスパイであるとか解釈すべきでなく、中には一般人も入っているのであり、これがまた一種 K. の裁判について関与する処があることは、後に K. が弁護士フルトの処で被告人のブロックから聞いた話からも明らかである。

このように裁判所は大衆の中にあるもの、普通の人間の世界と全く同じものであり、且つ人間の弱点と罪とを完全に備えたものである。弱くて小さくて欠点だらけの人間の本当の姿を備えたものである。

また K. が始めて裁判所に行つた時、彼はその所番地をはつきりと聞いてなかつたので、尋ねあぐんで帰ろうとするのであるが、彼はふと裁判所は罪人を探し出すのではなくて、罪にひきよせられると云われた言葉を思い出して、それなら如何に目茶苦茶な探し方をしても必ず彼は裁判所へ行き当るはずであると考えた。そして突差に思い浮んだ「指物師ランツの家はどこですか」とたずねて歩くと、しかも結局裁判所をたずねあてる話の如きも、また注目に値する事件であろう。

K. があらゆる努力をはらつて裁判、またはそこに行われる法の正体を掴み、自己の法律的不罪を証明せんとする経過を描いたのがこの小説の大部分であるが、我々がこの K. の努力の過程を通じて裁判、法について捉えうる注目すべき第一段の特徴としては以上のようなものがその代表的なものである。K. は裁判所とは何か、K. が相手にしている裁判所の上級裁判所は何か、その所在、構成を知らんとして懸命に努力をする。K. はこの裁判所も世上一般の裁判所と、すなわち一般法律的な罪を裁く裁判所と似たようなものと考えて、これにたいして彼なりの方策を講ずる。彼が弁護士の処の看護婦レーニーと仲よくなり、情交を結んだり、また肖像描家のテイトレリーと交わつたり、要りもしないその絵を買つたり、下宿の同居人ヴェルストナー嬢と交際を求めたりするのも、まずはこれらの人々を通して裁判所の実体を探り、また次いでこれらの人々によつて裁判に対して有利な影響を与えんがためである。

もちろん K. は始め逮捕を知らされた当時は、かかる非合理であつて腐敗した裁判所を問題にせず、むしろこれを改革せんとしていろいろな努力をする。先きに書いたように、裁判所でその弾詠の大演説をぶつたり、裁判所を無視してその召喚に応じなかつたりする(これは本文にはなく、完成した章になつていないからと云う理由でマクス・ブロー特が削除した部分にある)のもこのためであり、また裁判所そのものを軽視するゆえんである。それが時日が進むとともにしだいに裁判が彼の最大の関心事となつてくる。それは、彼が裁判そのものを肯定するとか、裁判そのものに意義を認めるようになってきたためではなくして実際この小説の中では、むしろ彼の心情的精神的生活がこれによつて妨げられるためである。これによつて K. の生活はすっかり乱されてしまう。それは彼の行動とか、日常生活、あるいはまた公的な生活に多少でも支障がおこるためではない。彼は銀行においてもまったくこれまでと同じように活動しているし、また彼の私生活においても障碍をうけるわけではない。むしろその私生活においては、彼の女友達のエルザとの関係は相変わらず継続されるし、また弁護士の処の看護婦レーニーとの情交もある。その上裁判所の公吏の妻との事件もあるし、また

ビュルストナー嬢との関係も継続されていると見なければならぬ。これはまた本文ではこの婦人との関係は一回きりで、その後はK. が死におもむくとき亡霊の如く死の場所に彼を導びく場面にこの婦人は出てくるだけで、その中間においては全然姿を現わさないのであるが、やはりマクス・ブロートも云っているようにこのヴェルストナー嬢とK. との関係はずつと続くのであり、この関係の成行きがまた裁判の成り行きと調子を同じくしていると考えべきである。このようにK. はその私生活、特に女性関係において完全な自由と華かな生活を享樂しているのである。

またその他一般的社交生活においても彼は十分に生活を楽しむことができた。彼の日常と云えば銀行、婦人達との交際が主な時間を占めるのであるが、その他に彼はある社交倶楽部に属して、ここでも彼は十二分に尊敬され、生活は一層楽しいものであつた。ここにほとんど独裁的とも云うほどの権威をもつていた一検事がいて、この倶楽部はほとんどこの人を中心として廻転していると云えるほどであつたが、彼はこの検事とその家に親しく出入りする程の親交を得ていて、従つて二人でこの倶楽部を牛耳つていたのであり、彼の快適な生活はさらにこの社交倶楽部により一層たのしいものにされていた。

こう云う訳で彼の生活は一見、公的にも私的にもなんらの障碍も見られず、ますます快適、好調であるように見える。しかし、実際にはこの裁判は彼の生活の根をくいあらして、生活に対する根気と云うか、彼の生活力を奪つてしまうのである。この事實は、問題がむしろ彼の精神、心情、良心の世界にあることを推測させなければならぬ。その事が彼と支配人代理との関係において象徴的に表現されている。

彼は職務を毎日普通のとおりやつている。しかし、だんだんつづつて来る裁判にたいする気がかりのために自分の仕事に打ち込むことができなくなつてくる。そのもつとも著明な例が支配人代理との関係である。この人と K. とは銀行頭取りの両腕のようにもつとも重んぜられており、互いに競争する立場にあつたが、どちらかと云うと事件当初は K. の方が追いつき、追い越せの優位の状態にたつていた。支配人代理は K. の好意をうるためには彼の別荘へ K. を招待するほどであつた。処が裁判が進むにつれて K. は自分の仕事をおろそかにし、大切な顧客をも放置するようになり、その間隙をぬつて支配人代理が勢力をのばして来て、K. の取引関係を横取りにしたり、K. の顧客を自分の方へ引きよせてしまう。

K. は仕事をしなければ自分の立場がなくなる。仕事をしようにもK. の頭は日夜裁判のことで一杯であつて、そのために精神も消耗し、銀行の業務に専心することはできない。仕事もますますおろそかになる。これがまた彼を煩悶させて、精神が消耗すると云う悪循環になる。しかし、それだからと云つて、彼がこのため彼の公的な生活に現実的に不利を来すとか、障碍をうける点は少しもないことは注意しておかねばならぬ。しかもそれでいて、ついに自ら甘んじて死に赴くと云う結果になる。裁判が具体的にK. に及ぼす影響としてこの小説に書かれているのはこれだけである。しかし、これがまたこの作品の中において裁判——ひいては罪の意味、概念を象徴する重大な事実として心にとめておかなければならぬ。

普通の小説であれば、自分の身を破滅にまでもつて行かせるにはこれでは少しく動機づけが足りないような気がする。この点に Richter や Elsberg の不満があるわけである。普通の悲劇の理論からすれば、完成した性格をもつた個人が、その意志の力を完全に發揮してその運命にぶつかり、その巨大な力におしひしがれて、万策つきて破滅して行く様に描くのが常道である。Hebbel の悲劇の理論などその典型的なものである。これでこそ悲劇や小説の読

みごたえがあり、面白さが生れるものと考えられていた。しかるに、K. においてはなんら生活上の拘束も加えられるのでもなく、その行動にも障碍はない。それなのにこの「逮捕」または「裁判」と云うものに脅かされ、じりじりと弱気になつて、生活の根をゆるがされてしまう K. は余りにも卑怯であり、これまでの文学の観念からすれば、文学の名に値いしないものとする人のあるのも一応もつともである。

しかし、人間全体を考えた場合にこう云う意志の弱い人が多いのではなからうか。むしろ大多数の人間は——一応強そうに見え、そういうふりをしておりながらも——弱い人間である。世の中に自分に対して反感や敵意をもつた人間がおり、しかもその人間がしつように自己に対して何かをたくらみ、あらゆる陰謀と工作をし、足許に穴を掘るような策動をしている事を考えただけでも眠られず、あらゆる理論と正義に反してでも結局相手にゆずつてしまう人間の方が大多数ではないだろうか。社会的正義を階級の立場から論じるのも一つの考え方である。しかし、この世界の社会悪はむしろこうした事態に注目してこそ根本的解決が得られるのではないだろうか。もちろん Kafka の作品、特にこの Der Prozeß はこの一つだけをテーマにしたのではない。しかし、彼の大きなテーマの一つである事は疑いを納れない。

H. Richter はその Franz Kafka において云つている。<sup>4)</sup>「Der Prozeß のテーマは自然的感情および思想の社会的秩序への同化である。」そしてこれに続いて「ここに云う論理と云うのは彼の強い罪の意識の論理であつて、これによつて彼は自己の生存の可能性を否定するのである。しかもそれと同時に彼は、自分が本当に生きようと思えばこの論理に従う必要はない。この論理を止揚する根拠はいくらでもある」と云つている。けつきよく Richter によれば、ヨゼフ・K. は現実の社会秩序と戦つて、これに敗れ、自分の正当な感情や理論をおりまげて、幾多の疑問をもちながら死んでいくとこの小説を解釈しているわけである。したがつて H. Richter はカフカの人生観、または人生にたいする態度を次の如く見ている。「注目し値するものは、カフカの人生像は発展も変化も合目的な行動も知らないものである。それは峻厳な決定論であつて、この決定論にたいしては如何なる個人的決定も自己欺瞞とされる。前もつて予定された事だけがこの世界ではおこつてくる。」

カフカの人生はすべて予定された通りにしかならないのであつて、個人の力、人間の意志がこれに影響を加える余地がない。したがつて Der Prozeß もこの決定論を述べたものと云うことになる。主人公のヨゼフ・K. はいろいろもがいて見たけれど、結局裁判所の筋書きの通りに死んで行くと言つてこの作品を解釈しているわけである。<sup>5)</sup>

Fritz Martini は、カフカの作品は現代人の実存にたいする絶望を描いたものであり、答えなき世界へのむなしい求めと質問であり、おそらく無意味なるものへの顛落を書いたものであると云つている。

とすると、カフカの作品は一度神を失つたが、さてそれに代つて彼をささえてくれる如何なるものをも発見することができず、暗黒と虚無の中にもがき、求めている現代人の姿がすなわちヨゼフ・K. であることになる。彼は死の直前に心内独語の形で云つている「彼が求めて得られなかつた裁判官はいつたい何処にいるのであろうか。彼が求めて達することの出来なかつた裁判所はいつたい何処にあるのだろうか。」この中の裁判官、裁判所をこの実存の象徴をとるならば、この作品は現代の虚無感を描いたと考える Martini の考え方には大いに一面の真理があるわけである。<sup>6)</sup>

J. Elsberg は階級文学の立場からカフカの文学を論じて、「カフカの文学は精神分析学を大

いに使っているが、これは、如何に才能があり、首尾一貫した思想の持主であつても、人生を偏狭な立場から一面的に見、これを恣意的に変更し、なかんづく人間への信頼を欠く場合には、その作品の人間的感情がいかにか歪められうるものであるかを示す好適な例である………進歩的な文学は人間、その個人的な保存、その精神的豊かさのために戦うのに反して、カフカの作品は心の貧困、無関心、絶望に役立つだけである。彼の作品は非写実主義である」と云っている。

カフカの作品が非写実主義的であるのは明々白々である。彼の作品の中には日常の常識では律し得られない事件でみたされている。看護婦レーニーとの始めての出会い、裁判所への出頭とその所在、大聖堂の場面もそうであるし、また最後に死刑につれて行かれるとき、ヴェルストナー嬢の幽霊にも似た姿もそうである。こう云う例は全篇のいたる処に出てくると云うか、全作品の構成、文体がそうであると云つた方がよい。そこでカフカをリアリズムの立場から見なければならぬと云うなれば、話は別である。しかし、カフカは一般に表現主義、またはシュールレアリズムの文学に属するものとされている。そうすれば、この立場に立つて、彼の作品を内容、文体、形式等すべての点から評価しなければならない。手塚は云っている。「作品においてそれら（作品の形式、内容）を見ることをおろそかにすると、しばしばその質の高下を無視し、ただそれを概念の構成物とのみ見て、無差別に材料化して、詩人の思想や理念の世界の再構成をはかることだけが行われる。それはよく行つても、詩人があろうと欲していることを研究者の追補作用によつて理想化して示すにすぎず、詩人の達成したものを正確につかんだことにはならぬ。」

したがつて、たとえカフカの裁判、罪と云うものを究明するにしても、先きに述べたカフカ文学の文体、手法、モチーフ、構成、文学系統などを充分に考慮した上での判断でないとその本質を見失うことにならう。

この点 H. Richter の方が一步深く問題の中に入っている。<sup>10)</sup>「彼の関心は常に主人公の表面的に尖鋭化した個人的な問題に向けられていた。しかるに当時の社会的環境は反射像の姿で述べられているが、しかも、それは非常に重大な点を捉えてはいるが、その捉える範囲がごく僅少であつた。カフカは人間を形塑したのであつたが、彼はその環境のくずれ易い関係をじつに芸術的な美事な切点において掴まえている。」

Walter Muschg はカフカの文学を僧侶的覚世の文学であると云つて、<sup>11)</sup>「彼の文学は迷える羊の飾り気のない譬喩である。……彼の世界の上には無益と無意味の名づけようのない哀愁、恐怖の灰色の光がただよっている。彼岸への、確実な救済への道は閉ざされてしまった。神は手もとどかない遠方に君臨している。神についての報告はあてにならない」と述べている。したがつて彼によれば、裁判はこの無限の彼方にあつて、その存在もたしかには認められない神なのである。ヨゼフ・K. が如何に努力しても、その本体を彼の前に現わすことのない裁判所への彼の努力は、無益と暗黒の中へさしのべる手である。この Muschg の取り方がより自然であつて、この作の大きな一面を捉えている。Elsberg や Richter のとり方はやゝ無理があるのではなからうか。

先きに述べたように裁判所はいたる処の屋根裏にある。すなわち社会におしひしげられ、圧迫されている階層の住むいたる処が裁判所なのである。とすればヨゼフ・K. の社会との斗争と云つても、社会そのものとK. との斗争ではなくして、一步つきつめて考えれば、K. の相手は社会的矛盾にしいたげられている人々である。この点は Richter もま

た指摘している処である。<sup>12)</sup>「被告のこの社会的地位に対応して、裁判所は市民社会によつて搾取されている人々や貧乏人が住んでいて、悲惨な生活をしている郊外の町々である。この事はカフカ自身が二、三の欄外の註でも指摘している。」とするとK. が戦っている相手は被搾取階級であつて、この戦に敗れてK. が死ぬのは搾取階級が被搾取階級に敗れたことになる。処が H. Richter も Elsberg この点に注意しないのはどう云う理由があるのであろうか。また我々にはこう云う解釈は余りに皮相であり、もしこれを認めるとしても、何故このように被搾取階級が遠く無限の彼方にあり、実体の不明確なものとして描かれているか、説明がつかない。

むしろ、裁判をする側に属するのは裁判官はもとより、弁護士も、下級銀行員も、下宿のオパサンも、下宿に泊つているヴェルストナー嬢も、弁護士の処の看護婦も、テイトレリーの処の少女達もすべてこれを考えるときは、これは社会全体を現わすものと考え方がよい。K. の周囲はすべて彼の裁判官なのである。そこでK. は云つている「被告のとるべき根本<sup>13)</sup>的態度は、いつでも心の用意をしており、決して不意をつかれぬ事であり、右に裁判官が立つているからと云つて左を油断してはだめである。」

このように裁判所は社会全体であると考えることができる。しかし、それに今一つ限定をつけねばならぬ。すなわちその代表者の中に被搾取階級、また性的に、道徳的に欠点をもっているものの多いことを考えるとき、これを単なる抽象的な社会一般と考えるよりも、むしろこういうすべての美点、欠点、また弱点を備えた人間と云うか、更にそう云う人間の奥にある良心と云つたようなものをこの際考える方が適當ではないだろうか。従来あり来たりの良心と云う言葉を使わないで、カフカがこう云う人物達によって象徴としているものは、今迄お高くとまつて穢れも欠点も弱さをも知らない良心と云うものではなくて、こうした人間的なすべてのものを包含した上での良心とでも云うべきものを指しているのではなからうか。

以上をよく考え合せて見るとこの作品を Elsberg または H. Richter のように解釈するのはやや無理があると考えられる。これに反して、Muschg や Martini の説はカフカの文学を迷える羊の飾りの無い譬喩であるとか、現代人の実存にたいする絶望を描いたものであると云うのであつて、大いに一面の真理を捉えているものと云えよう。

思えば現代人は19世紀以来意識的に神をすてて、自らの足の上に立ち、自らの頭脳によつて世界のすべてを処理し、解釈してそれによつて人類は幸福になるものとして、そしてニーチェの言葉を借りれば「神の死」を努力し、且つそれに成功した。それは単にドイツばかりではなく、全ヨーロッパ的傾向であり、わが日本でさえもまたその例外ではない。中世以来、神は全智全能であり、すべての善であり、神の御旨の通りにするのが正であり、真であり、また人間を幸福にするゆえんであると信ぜられ、またこれによつて人類は安神立命の境地にやすんずることができた。ところが、19世紀 Feuerbach, Strauß 以来人間はこの神を疑つた。神を捨てさつて、人間の理性によることこそ人間を幸福にするゆえんであると信じ、その通りに実行して、科学、技術は急速に進歩し、物質文明は驚異的な発展をとげ、いわゆる文明開化の世界へと発展した。人類は思いもかけぬ程に豊かになり、裕福になつた。

それで、人類は本当に幸福になつたであらうか。いな、昔の貧しかつた時代よりもより世界は暗く、不幸になつたとさえ云える。物質的には豊かになつたろうが、精神的にはむしろ貧しく、空虚にさえなつてしまつた。最も悪いことは人間はあらゆる絶対的な規準と云うものを失ひ、精神及びまた生活においても最後のより所、支柱を失つてしまつたことである。

この点 Muschg が暗黒への模索と云つたり、Martini が実存に対する絶望を描いたのがカフカの Der Prozess であると云ふのはもつともである。

しかし、またこの同じヨーゼフ・K. の心的状態を H. Richter は「彼の強い罪の意識の理論である」と云っている。また本文においても彼が論理的、<sup>14)</sup> 法律的には自己に何等の罪もないことを確信しながらも、しかも彼が最後に云っているように、「一年も裁判をしながらも自分は覚らなかつた事を見せるべきであろうか」とある。これは彼がこうした常識的、法律的論理の彼岸にある、ある一つの覚りに達していることを暗示するものである。

こうしてK. を裁くところのもの、K. が最後にはそれに服して死んで行く処のものは何か。この本体を暗示する叙述、事件はこの本のいたる処に見られる。例えば「裁判所は罪人をあばき出す処ではなく、それは罪人によつて引きよせられる」と云う言葉の如きもそれである。これは決して普通の裁判所ではなく、人間の心の中に陽にせよ、陰にせよかかる良心の問題があればそれが即ち裁判であつて、この裁判は決して罪人を探し出すのでなくて、罪人自身がこの裁判所にひきよせられて行くのである。

また、一般の裁判であれば、逮捕された人間はこれがために一種のらく印を押されたのであり、一般社会からは一種の疎外をうけるものである。しかし、カフカの裁判を一種の良心の問題と考えるならば、こうした人間こそ一般の人間と違つてより深い人間性の問題と真剣に取り組んでいる人々である。逮捕されていない人々より一段と高い人々なのである。したがつて、これらの人々は一般の人々と違つた特徴をもっている。Block の言葉にもあるように、これと本当に取り組んで死を賭して解決をはかる人は——K. も勿論その一人であるが——<sup>15)</sup> その唇を見れば一目瞭然にそれが現れている。そしてまたこれらの人々は美しいのである。ヨーゼフ・K. にあらゆる婦人が好意をいだき、<sup>16)</sup> 彼を援助するのを弁護士フルトは被告人は美しいからであると説明している。

こうした良心の問題は何時から始まるであろうか。それは自分がそうした問題として意識したときから始まることもあるし、また意識下にこの斗争が長いこと戦われていて、ある時期に突然その姿を現わしてくる事もあり、またあるものはこうした問題をかかえていると云つて大騒ぎしながらも、それは本物ではなくて、ある時期にいたつて本物になることもあるし、また永久にまがいで終つてしまうこともある。こうした良心の実体を描写したのが弁護士フルトのブロックへの言葉であつて、Block は5年以上もこの良心の問題と取り組んでいると思つているが、しかし、これはごまかしたり、引きのばしたりしただけであつて、<sup>17)</sup> 真剣なものではない。

弁護士は云う。「彼の無知は彼の狡猾よりもつとひどい。裁判はまだ全然始まつていないのだ。裁判を始める鐘の合図さへまだ鳴つていないのだと云つたら彼はどんな顔をするだろう。」この裁判、良心の真剣の問題はまた作中の他の処にも指唆されている。例えば「あなたはいやな方ですね。真面目に云つているのか、冗談なのか分りはしない。」これに対して「おつしやる通りです」とK. は美しい娘と話が出来たのを喜んでいつた。「おつしやる通りです。私には真面目はありません。それで真面目な事も冗談ごとも全部冗談にするのです。ただ逮捕された事だけは本当に真面目なのです。」K. が自己の裁判、良心の問題だけは本当に真面目に取り組んでいることを示している。

こう云う良心の決定は裁判所のように裁判日程をきめてある定められた日にその判決がおりるものではない。やはり「最終判定は大ていの場合、思いがけないときにやつてくるもの

である。誰とも知れない人の口から、何時とも知らない時に。」と云われている。刑務所僧はこの事をもつとはつきりと云つている。<sup>19)</sup>「お前は眞実を誤解している。……判決は一度にくるものではない。審理がだんだんと判決になつて行くのだ。」すなわち審理が判定なのであつて、人間の心情、良心、覚りの問題においてはその時々葛藤がこれ即ち判決である面をはつきりと刑務所僧はK. に教えているのである。

以上見來つたように、K. が求め、その本体を探り、これと戦い、ついにこれに敗れて死ぬ所の裁判は現在の社会一般ではない。むしろ、社会の中のしいたげられた層と云うか、いなむしろ、人間の弱点も、欠点も、すなわち人間らしいすべてのものを含めたそうした層とでも云うべきものであろう。それだからと云つてこの層はその弱点におぼれ、この欠点をよしとしているのではなくて、そうした弱点、欠点の彼岸にと云うか、こうした人間全体を包括した中に一つの新しいノルムを求めている、そうした社会である。こう云うように解釈してこそこの作品の最後の場面で、K. が死を直前にして云う言葉が生きてくる。「論理は確固不動なものではある。しかし生きんとする意志をもっている人間にはそれは問題にならない。」<sup>21)</sup>

この生きるると云う言葉に問題があるのではなからうか。この文を表面的理屈の上だけで、または法律的にのみ生きようとする人間と解釈すれば Elsberg やまた Richter の云わんとするような結論が自然に出てくる。しかし、これを裏返しにして考えて本当の意味において生きんとする人間、新しい意味で生きんとするものと解釈するならばどうであらうか。Elsberg や Richter のようにとるならば、それではK. は何故死ぬのであろうか。いなむしろ、二人の死刑執行人がちゆうちよしているのに、K. はこの二人から刃をとつて、自らを刺して、自ら死ぬのではないか。しかもまたやはりこの死を直前にしてK. は云つている。<sup>22)</sup>「私は一年間も裁判をして、それで私が何も教えられる処がなかつたことを示してよいものであろうか。私は begriffsstütziger Mensch として死ぬべきであらうか。」

彼のこの言葉は彼が一年間の裁判によつて教えられる処があつたこと、覚るところがあつた事を云つていないか。そうするとK. が自ら死んで行くのは当然なことになつてくる。しかも begriffsstütziger とはこの本の出た当時、即ち1920年前後の流行語であつて、概念におしひしがれた、理論倒れの意味である。そう云う人間のままで死ぬことを彼は拒否するのであり、即ち彼が今迄唯一の牙城としていたただ理屈一点ばりの、法律的、いな三百代言的な世界を捨てて、新しい良心の世界へつかんとする彼の決意をはつきりと表明している。

ただその後で「彼が見んとして得られなかつた裁判官は何処にいるのであろうか。彼の達せんとした最高の裁判所はどこであらうか。」と云う言葉もこれを見る事が出来ないで、だまされ、或は無理やりに殺されると云う意味ではない。むしろこれは新しい良心の世界が来なければ、人類の幸福、すなわち眞の生存はあり得ないことを確信に達したことを示す。それにまつたく背反するものとして彼は死んで行くのではあるが、しかもその本体を完全にはつかめないままで死んで行くことの遺憾の気持を現わすものとして取るべきである。

一つの作品を評価する場合に作品の形式、内容、文体、作者の作品に対する構想等を見ることをしないで、ただそれを概念の構成物とのみ見て、これを無差別に材料化し、詩人の思想や理念の再構成をはかる事の危険は、先きに手塚の説をまつまでもなく危険きわまることである。本論文においてはこの点において欠くる処はあるが、これからの事は先きに私の発表した「カフカの城と審判」「フランツ・カフカについて」「フランツ・カフカ」「表現主

義について」等において立入つて論じてあるのでここでは避けたい。そしてここでは主としてその論理的構成の面からして彼のこの *Der Prozeß* を見來つたわけであるが、しかもこうして見るときにおいても、裁判、または罪の本体を *Elsberg* の如くこの作品が写実主義的でないと云うこの一点だけを評価の根底において、この作品を論ぜんとする態度はまったく不当なものであり、また、ここでこれ以上取り上げて論ずる必要もない。

H. Richter はカフカの関心は常に主人公の表面的に尖鋭化した個人的な問題に向けられている。そしてこれを通して当時の社会像を反射鏡の姿で捉えている。主人公ヨーゼフ・K. のくずれ易い環境を芸術的な美事な切点において捉えてはいると云っている。しかし、この解釈の視野は全篇の見通しと云う点において、やや狭小に過ぎるうらみがないであろうか。K. と社会とを対立関係におき、現実の社会全般との戦に K. が屈すると云うように解釈しているのであるが、この見方はさきに述べた本作品の最後におけるK.、自身の言葉とか全篇を通じて描かれている一種特異な社会の特徴などと考え合せるとき、やや無理な解釈と断定せざるを得ない。

Muschg や Martini がこの作品を現代人の暗中への摸索とか、実存に対する絶望を描いたものであるとする見方はこの小説の全体を通じる雰囲気をよく捉えたものである。そしてその小説の解釈の八分まで論者もついて行ける。しかし、ここにもやはり、その最終部分で云っていることを軽く見すごしているきらいがないであろうか。

ここで、今一度この小説の中で裁判、及び罪と云われているものをごく簡単に、项目的にふりかえつて見て、さきに詳しく述べたその実体についての私の考え方を思い出していただく。まず第一にK.には女性関係の多彩さを除いて普通考えられているような罪に値することが、全篇をいかにさがしてもないことである。次に K. の相手として戦い、そして最後にはそれに屈し、肯定して K. が死んで行つた社会の構成である。または裁判所は罪人を探し出すのではなくて、罪人が裁判所に引きよせられるものであること、第四には、罪、即ち良心の覚醒の時期の問題、良心の斗争は個人の心の中にいつでも戦われている。しかし、これを軽視すれば何時までたつてもこの斗争はないに等しいと云うことを示した叙述である。第五には刑務所僧の云う通り、その判決に云うもの、及びその下り方、また良心はいくらでもこれを無視すれば、無視できるようでありながら、しかも、それは裏には強い権威と力をもつたものである等の事実である。

これらの事を考え合せるならば、この小説を Muschg や Martini のように単に現代人の虚無を示したものととつてしまう事は当を得ない。Richter もそれは肯定しているようにK. はこの現代の上つ面の道德とか、法律とか云うものに対しては罪を感じているのではなくて——これに対してはヨーゼフ・K. は最後にいたるまで、論理的、法律的に完全に無罪を証明できることを確信している——彼は性的にも道德的にも弱点をもつた人間、この人間の中に新しく求めらるべき、新しい良心と云うか、道德に対しての罪を感じ、この実体、本質を完全には知り得ないながらも、これを肯定して死んで行くのである。したがつて、この小説は人生の虚無、実存の暗黒を単にさし示しているだけでなく、その中に新しい人間の立脚点があり、これが求められねばならぬと云う、カフカの積極的な希求を示すものとして取らなければならない。

## 註

1. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 255
2. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 49
3. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 275
4. H. Richter, Franz Kafka 213 f
5. H. Richter, Franz Kafka 224
6. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 272
7. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 272
8. J. Elsberg. Sozialistischer Realismus und westeuropäische Literatur in : Kunst und Literatur 3/1957. 234
9. 手塚富雄. ゲオルゲとリルケの研究 7
10. H. Richter: Franz Kafka 118
11. Walter Muschg: Tragische Literaturgeschichte 343
12. H. Richter: Franz Kafka 208
13. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 198
14. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 269
15. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 221.
16. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 235
17. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 306
18. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 236
19. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 253
20. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 272
21. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 272
22. Franz Kafka, Gesammelte Werke: Der Prozeß 272

### Zusammenfassung

## Das Gericht von Franz Kafka's „Der Prozeß“

Hirao KONAMI

In Bezug auf den “Der Prozeß” von Franz Kafka gibt es allerlei mögliche Auffassungen und Interpretationen. Der Eine hält ihn für Darstellung, Enthüllung und Bloßstellung der heutigen Gesellschaft. Ein Anderer behauptet, daß es sich hier in diesem Buche um Unterwerfung und Ergebung des Helden unter die Mißstände und Widersprüche unserer ungerechten Welt handelt. Wieder ein Anderer ist der Meinung, das Buch sei die Verzweiflung des modernen Menschen an der Existenz, sein Suchen und Fragen in das Antwortlose hinein. Auch ein anderer Literaturkritiker beurteilt im Allgemeinen: Eine namenlose Trauer des Vergeblichen und Sinnlosen, ein aschfahles Licht des Grauens liege über seiner Welt. Der Weg ins Jenseits, in die Gewißheit der Erlösung sei ihm verlegt.

Der Standpunkt des Verfassers ist denen der zwei Letzteren ziemlich nahe. Aber er will hier nicht einfach das Trauern und Seufzen der Verzweifelten sehen. Er will beweisen—indem er die wirklichen und symbolischen Schilderungen über das Gericht, die Schuld und den Charakter und die Taten des Angeklagten Josef K. s in Betracht zieht— daß das Buch über das bloße weibische Klagen hinaus die Anerkennung und Notwendigkeit einer neuartigen Moral behauptet, die, anders als die veraltete morsche Moral, welche nur auf der oberflächlichen Gerechtigkeit und fleckenlosen Idealmenschlichkeit begründet ist, aus dem Menschen herauswächst, wie er wirklich so ist, schwach, mangelhaft und doch nach etwas Festem, Wahrem und Absolutem sucht und nicht umhin kann, das zu suchen.

